

# 『北之伊達日報』

(二月一日版)

二〇〇八年二月二日発行

総研大学生、「移住者」の気持ちで集結！

国立歴史民俗博物館や国立民族学博物館を中心とする総合研究大学院大学（総研大）の学生ら一六名が二月一日正午から北海道伊達市に集結した。学生は「移住者の気持ち」をもって臨み、一日から四日までの四日間伊達市に滞在し、市民（生活者）にとって必要な資料館（博物館）とは何かを学びにやってきた。

## すべてが文化 人こそ資源！

地元の記者の方々の新聞記事のおかげもあり、市民一八名もの参加者の多くは開始一時間前から集まるほどの熱気をかもし出した。そして伊達市噴火湾研究所の大島直行所長の怒涛のような情熱的な素晴らしい講演と、続く子ども頃もしくは大人になってから行った博物館を思い出すワークショップ「記憶の中の博物館」での市民の方々の積極的な発言の数々に、総研大の学生もたじたじの様子である。

大島所長発信―総合文化行政の確立を！

大島所長は、今回の学生たちの地域をどう伝えるかというテーマは未来永劫の課題であり、これ以外の課題はないと冒頭から力強い調子で賛意を表明された。そして市民のための文化行政を実現するためには三つの分野でステータスを確立することが最大のポイントであると述べる。具体的には行政、市民、企業である。役所の人間に文化財の重要性を認識してもらわなければ話にならないし、市民や企業に認められなくては仕事にならないからだ。その上で文化財や芸術財さらに細分化する日本の文化行政の縦割りの問題を指摘し、所長持論の「総合文化行政」を鮮やかに展開した。その上で、これからの学芸員は市民の期待に応えるためにも学位を取ることの必要性を強調。「縄文文化に詳しい大島さん」という評価に甘んじてはいけないのだ。「大島博士」になることで「物知りオジサン・オバサン」という日本の学芸員にさようならという所長の信念は本物だ。

とりわけ注目されるのは、大島所長が、大金を文化行政に費やすことへの市民の批判を受け止めることができたセンスである。行政は文化行政にポリシーが必要だし、そのポリシーは伊達市を良くしたいと願う市民の声がなければ豊かなものにはならない。そういう意味で、学生そっちのけの精神的な若さで圧倒的な存在感を

放った一八名の市民の姿勢こそ特筆すべき可能性の幕開けといえよう。

経験を資源に―白熱するワークショップ



あるグループでは、大島所長の講演を受けて、改めて伊達市の魅力は、お金で買えるような都市の文化というよりも、お金で買えない歴史による文化の豊かさであることを移住者の市民の発言から再確認した。参加者の一人は東京に住んでいたときは自分の町に関心をもったことはなかった。確かに現在の伊達市には映画館や大書店はない。しかしここには土地と人間の

生活との結びつきがある。興味や面白いと自分が思うから文化行政にも協力する気になれるという伊達市民の発言を聞いて、ますます伊達への愛着が、文化行政だけではなく町づくりの気運の源であるとわかり、自分も何かしたいという気にさせられる。

最後にワークショップ「記憶の中の博物館」では、子どもの頃と大人になってから行った博物館の受け止め方の違いが浮き彫りになり、参加者一同、お互いの経験談に時を忘れて夢中になった。あるグループでは、子どもの頃はやはり親に連れて行ってもらったというきっかけが一番多く、リンゴと女の子の絵、大きい恐竜や動物、ピラニアやサメ、美術館の印象的な白い建物、土器など、感覚的な思い出が多いことが特徴的であった。一方、それが大人になるとサーブスを提供される側、提供する側の視点をも意識するようになる。楽しみに遠方から見に行ってきた美術館が、団体貸きりで休館だったところを、事情を理解してくれて自由に見せてくれた学芸員の親切さが忘れられなかった話。美術などあまり興味がなかったのに行ってみたら、静寂な空間自体の魅力に気づいた話。それぞれ各班各人あふれる記憶の再生は尽きることがなかった。総じて、多くの人が博物館に肯定的であり、そこで出合い活動する人こそ資源なのであるという結論をもって一日目のフォーラムは幕を閉じたのである。



### アイデアを实らせよう―市民と学生の交流

一三日の学生とまわる伊達市の魅力再発見バスツアーもたちまち申込みが満員となった。

一日目のフォーラムが終った学生達は、口々に大島所長と伊達市民の方々の熱意と温かさに心を打たれる様子であった。リーダーの伊達元成さんは、皆から「トノ」という愛称で親しまれ、「大丈夫、みんなならきつと伊達市民のみなさんと多くの素晴らしいアイデアを实らせることができる」と叱咤激励してやまなない。その後、学生達は洞爺湖の温泉も大いに楽しんだと

いう。

ずっと暮らしているからこそ町の歴史・文化と魅力を知っている。外から来たからこそ地元で気づきにくい発見が生まれる。この四日間、伊達市民と学生の交流にますます目が離せそうにもない。(伊達総局 根津朝彦)

### 耳を澄ませて―参加者の声

☆色々な考えを聞き、どのようところにポイントをおくのか、また発想のちがいはどうかということを知りましたか。(伊達市・60代・女性) ☆漠然と感じていた文化に対する思いがトータル的な思いに変わった。(伊達市・60代・男性) ☆初めてお会いした方々もスムーズに話し合うことができ、人間っていいなあと思いました。計画進行した方が、最高でした。1+1+1+2ではなく、1+1+1+5になる人だと思いました。とても良い1日を過ごせました。(伊達市・70代・女性) ☆やわらかく、人々が思い出や経験を出すようにする方法がすごいと思います。やはり、面白さからアイデアが出ます。(総研大 20代 女性)

☆はじめはどうかと思ったが参加して、時間がたつと楽しくなってきた。面白い企画でした。(室蘭市 50代 男性)

☆文化は生活の一部ということを再認識できました。久しぶりにワークショップでした。とても良い企画でした。伊達さん始め皆さんありがとう!!伊達市民であることに喜びを感じましたヨ(伊達市 60代 女性)